中野重治全集

第五巻

中野重治全集

中野重治全集第五巻

一九七六年十一月十日初版第一刷発行

著者　中野重治

発行者　井上達三

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　〇三(233)七六五一(代表)
振替　東京　六―四一二三

印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所
装釘　栃折久美子

© 1976 Shigeharu Nakano
Printed in Japan
0393-73305-4604

第五巻　目次

歌のわかれ　一
鑿　三
手　二七
歌のわかれ　五七
街あるき　九七
むらぎも　一三三
後記　四〇七
著者うしろ書　一つの高等学校期と一つの大学期
解題　四一五

歌のわかれ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

鑿

片口安吉はおそい朝めしを食つてしまうと「さて今日はどうしようかな。」と考えた。目の前にある今食つたばかりの皿や茶碗の始末をすることがいつもにも増しておつくうに思われた。

安田がいつしよにいたうちはそれほどでもなかつたが、彼が長町の仏具師の二階へ引つ越して行つてからはいつそう自炊ということがいやになつていた。時には彼も朝はやく起きていそいそと朝めしをつくることがあつた。しかしそれを食つてしまうと、醤油の残つたつけものの小皿とか、内側に味噌かすの線のついた味噌汁のアルミニウム鍋とかいうものが、なんともいえぬわびしいものに眺められた。そうして、もとこの部屋に一人で自炊していた松山が、ときどき安吉をひつぱつてきて二人で飯を食つた気持ちに心から同情できるのであつた。

金沢という町は片口安吉にとつて一種不可思議な町だつた。犀川と浅野川という二つの川がほとんど平行に流れていて、ふたつの川の両方の外側にそれぞれ丘があり、ふたつの川のあいだにもう一つの丘があり、街全体は、ふたつの川と三つの丘とにまたがつてぼんやりと眠つている体であつた。そうして、街の東西南北にたくさんのお寺がかたまつていて、町の名にも寺町とか古寺町とかいうのがあつた。町の中央に名高い兼六公園という公園があり――つまりこの公園は川にはさまれた丘陵に拠つているのであつた。――それにつづいて練兵場と衛戍病院とがあり、衛戍病院わきの急な坂をおりて行くとほとんど山のなかへはいつたような谷間の細みちになり、この細みちの両側はいろいろな宗派のお寺の軒つづきになつていた。

両側にある寺はわりに大きいものだつたが、その突きあたりの、これも谷川ともいうべき小川にかかつた石橋

を前にひかえた寺だけはひどくみすぼらしい小寺であつた。

谷間になつているうえに寺々の杉の大木なぞが並んでいるため、この小さな区域は大体が暗くて湿つぽかつたが、突きあたりの小寺は谷の行きどまりに位置していて、うしろの孟宗藪がそのまま山になつているためとりわけて暗く、その庫裡の北向きの二階部屋は夏冬とおして日光というものがはいらぬのであつた。

この部屋を最初に見つけてはいつたのは松山内蔵太であつた。内蔵太はからだの大きなまじめな生徒であつた。おとなしい勉強家だつたが、気質のうちのある強いものが内側へくすぶりこんでいるようなところがあつて、自分でそれに堪えられなくなると雪の積つた街を草履ばきで歩いたりするらしかつた。

寺の家族は住職と細君と十歳ぐらいの娘と六つぐらいの息子とであつた。細君には後妻らしいところがあり、二人の子供にも連れ子ではないかと思われるふしがあつた。夜おそく陰気な夫婦喧嘩の声が二階へ洩れてくることがあり、その陰気さのなかには、妻にたいする住職の貧とからみ合つた嫉妬の念がこもつている感じであつた。

二階の部屋にいても夜つぴてぽちやんぽちやんという水の音がきこえていた。井戸も水道もないこの寺ではいまだに山水を使つていて、うしろの孟宗山から樋を伝わつてきた水が年中台所の中央の大きな井戸側のなかへしたたりたまつていた。

まわりの寺々にくらべて檀家というものなども少ないらしく、寺の格も低く、二人の子供もよその子供と遊ばずに二人きりでころころ遊んでいるところなど、何から何まで貧乏たらしい寺の様子だつたが、そういうことすべては、内蔵太がすこし離れた町通りの洋服屋の裏二階へ越して行つたあとも少しも変らなかつた。

こういう寺のありさまは、松山のすぐあとへ越してきた片口と安田との若い二人にも何としても楽しめぬものであつた。裏の藪から筍を掘つてきて筍めしをつくつたり、芹を摘んできてひたしものをつくつて食つたりした挙句には、二人で町のそば屋へ出かけてたらふく安酒でも飲まねばおさまらぬのがきまりであつた。

片口も安田も豊かでない学生であつた。高等学校の生徒である以上分相応なものではあつたが、酒を飲むかわ

りには陽の射さぬ寺の二階で自炊をせねばならぬ程度であつた。そうして、二人の自炊生活も安田の恋物語の終るとともに片口一人のものとなつた。

春の終りごろのある日、その日安田は学校を休み、久しぶりで教室へ出た片口が寺の二階へ帰つてくると、寝ころんでバットをふかしていた安田が物憂そうに彼のほうへ頭をあげた。生来快活で、ごく淡泊な意味で豪傑風なところのある安田には、こういう物憂げな風情は似ても似つかぬものであつた。

「今日ね、ここへメーチヘンが来るんだ。」

「ふうん……」といつて片口も何となくお茶などを飲んだ。

「つまり君を訪ねてくるんだね。」

「そうなんだ。」

「つまり君のリーベなのか。」

「そういうんじやないんだがね……」

安田が眩しそうにしていればいるほど片口は何とか言わねば安田に悪いようなぐあいであつた。

「ごめんください。」という細い声がちようどそのとき下できこえて、寺の細君が「はい。」と答えるのがきこえたのといつしよに安田が飛び立つようにして突つ立つた。そして片口の方へちらりと弱気な眼つきを投げてとんとんと階段をおりて行つた。

「や、いらつしやい。」

今度あがつてきた安田のうしろから色の浅黒い娘が現われた時、片口は心から歓迎したい気持ちで声をかけた。娘はもじもじして黙つたまま安田にとも片口にともつかずお辞儀をした。

「おれ、ちよつと出てくるからね。」

なんとかして娘を歓迎したく、また気持ちをらくにさせてやりたかつたが、どうにも術がないので片口はそう

いつて外へ出た。そうして公園のなかにある県立の図書館へ行つて、そろそろ学期試験の勉強を始めている学生たちの頭へ軽蔑するような視線を投げ、威張つたような顔つきで特別室へ通り、このまえ見残した鍔の写真のいつぱいはいつたイギリス本を五、六冊借り出してどつかりと椅子に腰かけた。

これが安田の恋物語の——片口に知られたかぎりでの発端だつたが、その後安田からは格別の報告もなく、そのうち一と月もたつたころには物語の終末を聞くていたらくであつた。

偶然同じようにして、安田が学校を休み、片口が久しぶりで学校から帰つてきたある日、この前と同じように寝ころんでバットをくわえていた安田が片口を見るなり待ちかまえていたように話を持ちかけた。

「片口、いつかのメーチヘンね、おれやめようと思うんだ。」

「やめようと思うつて、どうしたんだ。」

「むこうがあんまりまじめで苦しいんだよ。おれ、出てくるからね。練兵場で待つてるんだ。」

その晩安田はおそくなつてひどく酔つぱらつて帰つてきた。

その後一度か二度、片口も安田も留守のところへ娘が訪ねてきたらしいことを細君が安田にいつていたが、それも安田には堪えられぬらしく、ひどく雨の降る日に仏具師のところへ引つ越して行つてしまつた。そしてそれ以来片口の自炊生活がいつそう陰気くさいものになつていた。

「どうしようかな。どうしようかな。どうしようかな。」

口のなかでくりかえしながら彼は絵の具箱を机のわきから引き出した。蓋をあけてみるとまだ絵の具はあつた。彼は汚れたままになつているパレットの上を拭つたり擦つたりして、できそこないの自画像のカンヴァスをさげて「ちよつと出てきます。」と細君に挨拶して玄関を出て行つた。

彼はそのまま右隣りの寺の庭を横切つて、孟宗藪つづきの山腹を斜めに登つて行つた。そこにも寺があり街のはずれの部分があつた。街のはずれといつても都会の場末といつた感じではなく、遊んでいる子供も働いている

女などもほとんどまつたく百姓風であつた。

石段だの木の根つ子だのを踏んで丘陵地の上へあがりきるとほんとうに山の上へ出たようにあたりが明るかつた。そこいらは、彼の部屋から十町とは離れていないのに彼には初めてであつた。片口安吉は安田徳蔵や松山内蔵太や舟木篤などと同じく学校を一年落第していたから、足かけ四年のあいだ町のすみずみをほつつき歩いていたのだけれどもこの方面には足を入れていなかつた。

眼のまえ一面に畑がつづき、右手には南のほうへ伸びている街の屋並が頭だけで覗き、その端に見える高い建物は医科大学と高等工業学校とにちがいなく、この全体が弱い盛りあがりをなして、その向うへ低い山脈の頂上の部分が顔を覗けている光景はいかにも丘陵地らしい美しさであつた。

彼は時に立ちどまつてうしろをふりかえり、そのつど、丘、街、川、それに反対側の丘陵地をふくめた風景が「ウェルテル」のなかのある場面に似かよつているなどと考えて歩いて行つた。そうしてすつかり街を遠ざかつたある地点へきた時――ある地点というよりほかはなかつた。そこがどの地籍に属するか彼にはかいもく見当がつかなかつた。――彼ははつとして立ちどまるといきなり眼のまえの畑へずかずかと踏みこんで行つた。

畑の端に榛の木が六、七本並んで立ち、その向うが傾斜になつているらしく、赤煉瓦の古風な建物の頭がそのわきから覗けていた。彼は畑を二つ三つまつすぐに踏み越した。建物の姿がすつかりあらわれてきた。思いもかけずそこに監獄が建つているのであつた。

太陽は頭の上を通り越していた。太陽のあたりの空は錫色に輝いていた。その下で草も木もまだ青々としていた。彼は赤い建物を画面の右半分以上に入れ、その次ぎに建物に沿うた桜並木を縦に入れて三脚に尻をおろした。

赤煉瓦独特の白い粉を吹いたような朱の色、桜並木の黒ずんだ緑とそれの植わつた土手の草の柔らかい緑、左上隅の晴れた空、その下の村々と畑との横に重なつた線、特に桜並木の影が土手の草を明暗に染めわけて、そのあやを絶えずちらちらさせているのが言い甲斐なく美しかつた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

彼は、小学校と中学校とで学科として習つた以外全然絵というものを習つたことのない手つきで手を動かしていつた。きたない自画像の顔はずんずん塗りつぶされた。彼はいつか京都で見た「草枯れし監獄の横」という絵を思い出した。するとそのとき泊めてもらつた自分と同じ姓の片口英男の家の二階の光景が思い出されてきた。

片口英男と片口安吉とは似ても似つかぬ同姓の二人であつた。英男のほうは小づくりで色白でやわらかく太つていた。安吉のほうは痩せて色が黒くていつも犬のようなとげとげしい眼を光らせていた。意識しないで生活を楽しむというふうが英男にはあつた。安吉のほうは「毛ぎらい」ということを食つて生きているようであつた。精神的にも肉体的にも善良で動作ののろいのが英男の特徴であつた。

京都へついて最初の夕方、英男と英男の二人の妹と安吉とは、英男の家の天井の低い二階で新聞を読んだり無駄話をしたりしていた。そのとき英男のいちばん上の妹が階段の上へ顔を出して小声で呼んだ。

「にいはん……」

それにつづいて言つた言葉は安吉には聞き取れなかつた。彼は、ぱつと起ちあがつた英男がつんのめるようにして階段へ消えて行くのを見送つた。そして金沢へ帰つてから、それは家の前を行つたり来たりしている英男の恋人を見つけた妹が、兄に同情してそつと知らせたのであつたと聞いてつくづく感心した。

「だつてあのとき君の妹はまだ階段にいたんだろう？　よくも突きとばさなかつたね。」

「それやいたさ。おれにもわからん。」

そういつて英男は悪気のない笑顔を見せた。

恋はのろまをすばやくす
安田徳蔵また然り
されどおれには恋はなし

「草枯れし監獄」は高川高政
「草のあおい監獄」は片口……

そのとき安吉はうしろに人かげが立つのを感じて振りむいた。その安吉の顔へ、あかい着物を着た囚人が二、三人、ひとのよさそうな笑い顔を見せた。その二、三人のうしろにもまだ何人かの囚人の姿が見えた。かっこうからすれば彼らは耕耘作業に出ているのにちがいなかつた。するとここいらは監獄の畑なのだろう……

人が見ていることは安吉には気にならなかつた。彼は関根正二とか村山槐多とかいう人間の絵を偶然みて絵がかきたくなり、その後一人でそれも時たまかいているだけであり、『油絵のかき方』などという本を読んでみてもいつこうめんどくさいばかりであつた。いまだに彼は、カドミウム・イエローだのガランスだのという西洋名を使つてもいず使うこともできなかつた。

「この人たちは絵を見るなんてことはあまりないんだろう。まして絵をかいているのを見るなんてことは全然ないんだろう。」

彼は、自分の楽しみでしていることが人にも——特に楽しみの少ないこういう人たちにも楽しみを与えることにかすかな仕合せを感じて筆を動かしていつた。

もう一度人の動く気配がした。安吉はふりむいた。

「さいなら。どうもありがとうござんした……」

すぐうしろに立つていた一人がそういつて安吉の顔を見た。それは挨拶のようでもあり、冗談のようでもあり、仲間や役人以外の人間に言葉をかける機会を楽しむためのようでもあつた。にやりとした安吉には恰好な返事がみつからなかつた。彼はそのままま煉瓦の仕上げのほうへもどつた。

「……」

一種の嘲笑のような声がきこえたので安吉はもう一度ふりかえつた。

「監獄の人間だからというので返事もしてもらえぬわい……」

正確には聞き取れなかつたがそれはそういう意味の言葉であつた。安吉はぼんやり突つ立つたまま、一かたまりになつて役人に引率されて帰つてゆく彼らのうしろ姿を見送つた。彼は非常につらく、気のきかぬ自分の性癖に足ずりするような敵意を感じた。

「ほんとうにそう取つたんだろうか。しかし冗談だつたかもしれぬじやないか。しかし冗談だつたにしろ、ああなると、そのまま持つて帰つちまうんじやないか……」

安吉はもう一度画架へ向つたが興味は失われていた。陽もかなり斜めになつて、建物の影は並木の土手をすつかり暗くしてしまつていた。

そろそろ日あしが延びはじめていたがまだ空地などには雪が積つていた。わりに暖かいため、そういう雪のかたまりは溶けて道路をびちよびちよに濡らしていた。もう暗くなつて、もともと人通りの多くない街はいつそうしずかになつた。そういういつときのあと、夜の八時になつてにわかに広坂通りが賑やかになつた。ある人むれは公園のほうから、他のむれは香林坊(こうりんぼう)の方から、どれも夜のなかで黒いマントなどをかぶり、何か昂奮してしやべりながら高等学校の門へ流れこんで行つた。

片口安吉もそのなかにまじつて門をはいつて行つた。彼は心配でもあつたが自信もなくはなかつた。彼はまつすぐに、教師の出はいりする正面玄関の階段をあがつて行つた。

控所へはいる入口で、彼はなかから出てきた徳蔵にぶつかつた。

「片口、おまえ落ちたぞ。おれも落ちた。」

徳蔵の声はかなり高かつた。電燈が暗いためよくわからなかつたが、彼の大きな男らしい眼がきらついている

感じであつた。

「そうか……」

安吉には徳蔵の高ごえが冗談のようにも聞かれた。同時に、わかるものなら早くきかしてやれという気持ちも感じられた。

「松山は通つた。浦井は駄目だ。おれは学校をよすよ。おまえは体操だ。」

控所のなかはほとんどまつくらだつた。部屋の中央に大きなテーブルが五つばかり並んでいて、その上で西洋ろうそくの灯が人いきれでちらちら動いていた。安吉は特別な権利があるような挙動で黒い人かげのあいだへ割りこんだ。

彼の名はすぐ見つかつた。平均点数は六十二点二だつた。総平均の欄では体操にだけ朱線がはいつていた。その平均点数は三十九点六だつた。

「駒本の下司(げす)め……」と思いながら彼は全身に疲れを感じた。彼は第三学期の体操を半分以上休んでいた。それはそのころ知合いになつた頼子(よりこ)の病院へかよつていたためで、試験のはじまるまえ一週間ほどはノートをかかえて病院へ泊りこんでいた。体操には試験がないので、彼は病気で病院にいるむねを丁寧に手紙に書き、はつきりわからせるために病院の所在地と病院名とを書き、それと普通の欠席届とをいつしよにして受持ちの駒本教授に送つておいたのであつた。もし駒本が、そのことを十分に取り次ぎ、教授会の席で一席強調しさえすれば問題はないはずであつた。浦井と二人で駒本に山鳥の進物を持つて行つたことも滑稽な愚劣事にすぎなくなつた……

「わたしが明治十四年に仙台から東京を指して出てきますと……」

そういう愚劣な話――それは要するに、駒本の教え子がみな立派な役人なぞになり、盆暮には忘れずに贈り物をくれるという結びへ行く懐旧談であつた。――をする時の駒本の表情をふりはらうようにして安吉は門の外へ出た。

彼は浦井を訪ねようかとも思つたが家にいそうにも思われなかつた。だいたい彼は控所へあらわれていなかつた。徳蔵は酒でも飲みに行つたにちがいなく、これを追うのも始まらぬことであつた。しかしこれからまつすぐお寺の二階へ帰ることも彼には忍べなかつた。

監獄の絵をかきに行つたあと彼は別の寺へ引つ越していた。この寺では二つの貸間をしていて、奥の部屋には安吉と同じクラスの柴田という男がいて安吉も試験の世話になつていた。しかしそれ以外に安吉と柴田とは何の交渉もなかつた。あるとき柴田の口から安吉の留守に掃除にきた寺の中の細君が——この寺はおばあさんと中ばあさんと娘と女三人きりの家で、安吉が越してきた以後坊さんの養子がはいつていた。——机の上にあつた頼子の写真や手紙を見つけて騒ぎまわつた話を聞き、案外柴田もひと口乗つたのではないかと疑われ、疑ぐることが不愉快でますます没交渉になつていたが、この中の細君や柴田やが、安吉のことを同情しながら話していそうな気がして彼には不愉快であつた。しかし彼は何よりも母の顔を考えることでたまらなかつた。

とつおいつした挙句、彼は野上教授のところへ行つた。野上はドイツ語の教師で、安吉と郷里が近く、代々の豪農に育つて親切なおとなしい人であつた。

「どうも弱つたね。高田君なんかもだいぶがんばつたんだがね。なにしろ嶺さんが起ちあがつて反駁したもんだから……」

しかし野上教授は、くやしがつている安吉の気持ちに逆に気圧されてきたらしく、自分が学生時代に胸を病んで休学した話に行き、それがかえつてよかつたという経験を話し、最後に子供の話へ逃げてひと息つきたいらしいのが安吉に感じられた。

「僕の次男は絵が好きでね。絵ばかしかいてるんだ。ひとつ君に見てもらうかな。」

そのとき安吉はふと思いついてきいてみた。

「先生、大学の選科つてどういうんですか。」

「選科か。選科だつたつておなじだがね……」

しかし野上教授は選科のことはよく知らなかつた。いつしよにはいつた同級生のうち、二度落第したのは安吉、徳蔵、浦井、須永の四人だつた。安吉は須永とはそう親しくなく、徳蔵や浦井も格別親しくはしていなかつた。徳蔵は学校をよすと言い、浦井も兵隊のことがあるのでこんど駄目だつたらよすというようなことをいつていた。須永が残るとしても、もう一年こんな街にとどまることはとうてい安吉には馬鹿らしかつた。選科のことをほんとうにしらべてみようと決心して彼は寺へ帰つて寝た。

「ないことではないんですさかい、あんまり気落ちあそばさんでいね……」

あくる朝安吉が朝めしのあと部屋かたづけをしていると、下の中ばあさんがお茶を持つてあがつてきて、心配らしく金沢言葉で言いながら彼の前に坐つて彼の顔を眺めた。

「そうです、そうです。あることで、あつたんですから。それで僕は、今夜東京へちよつと行つてきますからね……いや、なんでもないんです。大学に選科つてのがあるんです。もう一年いるよかそのほうへ行こうかとも思うもんですから。駄目ならすぐ帰ります。」

それから彼は五十マイルばかり離れた頼子の病院と東京の高見政二郎とに電報を打ち、前に一度選科の話をしたことがあり、今度やはり落第した別クラスの東端の下宿へ急いで出かけた。

「おい、もう出よう。」

安吉は二時間ばかりもやつていた„Bahnwärter Thiel“の翻訳から顔をあげて、そばの鶴来金之助に声をかけた。

「あれやア日本訳が出ているよ。」と田方新之丞に注意されて以来、だいぶ馬鹿らしくもなつていた仕事であつた。学校の図書館は腰かけも木ベンチになつていて痛かつた。日曜日でノートに顔をつつこんでいる生徒もあま

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com